

序章 哲学は何を問題にしているのか

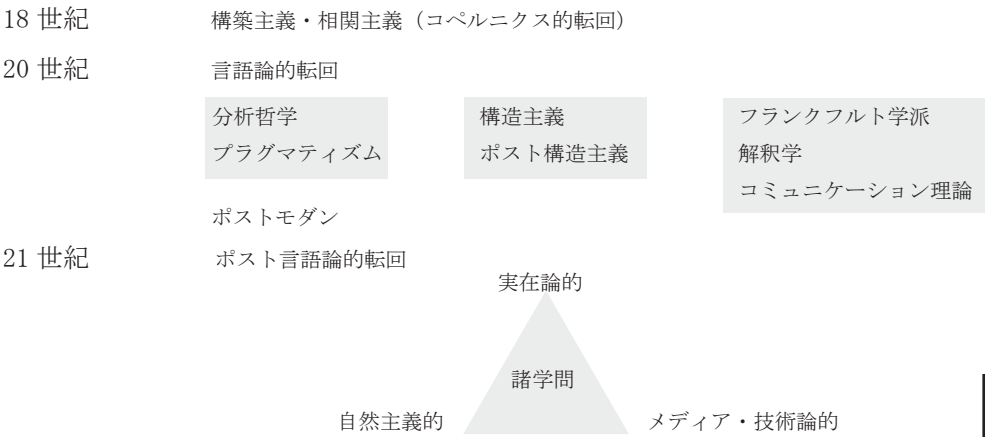
哲学は人生論や、ある哲学者についてのたこつば的な研究だと認識されたりする。

本書では、ミシェル・フーコーの

「たった今進行しつつあることは何なのか、われわれの身に何が起ころうとしているのか、この世界、この時代、われわれが生きているこの瞬間はいったい何であるのか、われわれは何者なのか。」を方針として6つの議題を取り扱う。

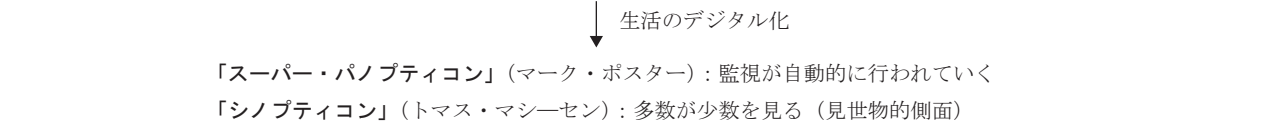
第1章 世界の哲学者は今、何を考えているのか。

【20世紀以降の哲学の動向】



第2章 IT革命は人類に何をもたらすのか

スマートフォン及びSNSの普及によって「アラブの春」が起こった。これはスマートフォンの「ドキュメント性」（マウリッツィオ・フェラーリス）によるものだと考えられる。「ドキュメント性」の特質として、①公共的なアクセス可能性、②消滅せずに生き残ること、③コピーを生み出せること、が挙げられる。この特質を使って市民は民主化運動を成功できたが、反対に監視の手段にも使われる。近代社会全体が刑務所のようなパノプティコン型をしている。（フーコー）パノプティコン社会の特徴として、①監視する者とされる者の非対称性、②「監視」によって人々が規律訓練されること、が挙げられる。



「規律社会（～第2次世界大戦）」から「管理社会」へ
分割不可能だった個人が断片化された情報まで細分化されていき、無意識的に管理される。このように情報が絶えず収集できる時代となった今、ビッグデータが形成され、人工知能が自立／自律的に学習するようになった。結果、チューリングテストを突破したり、やフレーム問題を解決するようになっており、人工知能が人類を超えて、人類の脅威となる危険性は十分ある。

→「ロボット工学の三原則」を加味して開発すべきなのかもしれない。

第3章 バイオテクノロジーは「人間」をどこに導くのか

1950年代 ワトソン/クリックがDNAの二重らせん構造を発見 →バイオテクノロジー革命
1970年代 「試験管ベビー」が誕生 →「ゲノム編集」が容易にできる時代へ
➡自然としての人間の性質が変わる「ポストヒューマン（人間以後）」へ。人間の尊厳を失う。（フランシス・フクヤマ）
⇔「費用、安全性、有効性」をクリアするなら、遺伝子組み換え賛成。人間とは違う生物（ポストヒューマン）へ。（グレゴリー・ストック）
現在の人間の能力を増強することは「人間の尊厳」を侵害するのではなく、超えていく。「トランスヒューマニズム（人間超越主義）」（ポストロム）

【人為的に操作できることで優生学が復活するのか】

ナチスに代表されるような国家的、政治的な優生学とは異なる、親が選択するリベラルな優生学なので単純に反対不可能。

【クローン人間への誤解】

クローン≠コピー人間＝年の離れた一卵性双生児
クローン人間を禁止する動きは偏見に基づいたもの（G.E. ペンス）
⇔作られたものと自然に生まれたものという区分が曖昧になり、混乱に陥る。「出生性」の損失。（ハーバマス）
➡アリストテレス以来の思考様式を破る「非＝区分化」は問題。

【不老不死の賛否】

反対派の意見 ①不公平性②人生の退屈さ③人格の同一性の欠如④人口過剰⑤健康維持費用の増大
以上を踏まえた上でも、「生命が受容可能な器」をもっている限り、生命を救う必要がある。（ジョン・ハリス）

【「人間」は終わるのか】

人間（経験的＝超越論的二重体としての人間）を出発点に据えて、実在的領域を認識するようになり、近代が始まったが、人間は消滅しつつある。諸学問において、人間という概念が必要なくなってきた。（フーコー）
人間中心主義からポスト人間主義の時代へ。

第4章 資本主義は21世紀でも通用するのか

【資本主義の問題点とされる「格差」は本当に悪なのか】

格差是正＝平等主義
誰もが十分にお金を持てば格差は許される＝貧困解消＝十分主義（フランクファート）
道徳的に重要なのは「貧困の救済」

【資本主義の自由とは】

19C 「古典的リベラリズム」：市場の自由放任
20C 「社会的リベラリズム」：政府の「市場介入」、福祉政策
20C末 「ネオリベラリズム」：富裕層、国家が優遇される「市場原理主義」

【グローバル化から考える資本主義の未来】

グローバリゼーションのトリレンマ（ダニ・ロドリック）
→賢いグローバリゼーションはいかに可能なのか、議論が必要。

「資本主義は成功によって生きのびることができない」
「革新（創造的破壊）」を繰り返し、やがて自動化し、結果的に圧迫され崩壊する。（シュムペーター）
今賛否を決めることは難しい。

第5章 人類が宗教を捨てることはありえないのか

20世紀の西洋近代 「世俗化（＝社会と文化の諸領域が宗教の制度や象徴の支配から離脱するプロセス）の時代」（ピーター・L・バーガー）
⇔21世紀 宗教を信仰する人の増加、9.11をはじめとしたイスラム教信者によるテロ ⇒「ポスト世俗化の時代」
➡信仰の条件の変化という意味における世俗的な社会。神の信仰が不可避な時代から、信じないことが不可避になり、信仰が選択肢の一つになる。（テイラー）

【宗教は対立するしかないのか】

「多文化主義」ではなく、「社会統合」を選択するとテロなどの対立が無くなる（ケベル）と考えられたが、フランスでその仮説が破られた。
グローバリゼーションにより、選挙で国民が異教徒の政党を選択し、「国民国家」を再編する時代を示唆。

【科学と宗教の対立】

科学は経験的、宗教は道徳的とまったく別の領域で機能しているので統合・対立不可能＝NOMA原理（グールド）
⇔宗教なしでも人は道徳的な行動をする（ドーキンス）
➡宗教を自然現象の一つとしてとらえ、解明し、呪縛を解く。（デネット）
⇔国家が物理的な存在なしに成立しているように、宗教を自然科学で証明することはできない。（ガブリエル）

第6章 人類は地球を守らなくてはいけないのか

1967 論文にてリン・ホワイ特が、「科学」と「近代技術」が融合することで人間が環境を搾取するようになり、人間中心的なキリスト教的態度から発展したと述べたことが地球環境問題の始まり。
➡人間中心主義批判が定石化
【環境保護思想】
「土地倫理」＝共同体という概念の枠を土壤、植物、動物まで拡大する。
「生態学的良心」＝生物共同体の全体性、安定性、美しさを保つときは正しく、そうでないときは間違っている。
環境保護のためには経済的利益は否定されるべき。（アルド・レオポルド）
➡ディープ・エコロジーに発展
「生命圏平等主義」＝平等主義を河川、文化など無生物にまで広げる。（アルネ・エス）

地球の人口を10億人に減らす必要があるという主張があり、思想に問題がある。
⇔経済と環境を対立するのではなく、統合すべき。（アマルティア・セン）
「生態系サービス」＝人々が生態系から直接・間接に享受する便益。
「環境を守るためにいくら払ってもいいか」のアンケートで環境の価値を図る。
⇔人間中心主義と同じように、経済学が環境を包括してしまっており、一元論から脱却できていない。
多様な立場や評価を許容する「多元論」へ（ブライアン・ノートン）

結局経済学では環境の価値は定まらない。

【経済学以外の捉え方】

「リスク社会論」：起こりうるリスクを評価する社会。（ウルリッヒ・ベック） リスクの評価方法に問題。
「再構築主義のポスト・モダニズム」：新物理学と新生物間に基づく世界観。（キャリコット） 意義、リアリティなし。

【終末論は本当か】

以上の議論は人口が膾炙して人類が滅亡するという終末論を前提としていたが、それは誇張されていて、本当に優先すべきことが無視されている。（ビョルン・ロンボルグ）
「コペンハーゲン・コンセンサス」：「今4年間で500億ドルの費用をかけて世界の役に立てるとしたら、どこに使うべきか？」という議題で著名な経済学者が議論する。
→「地球温暖化」の優先順位が最下位。（p.305）
「地球温暖化論」が政治性を帯びてきている。原因や優先順位などを根本から考え直すべき。